

大学間の中堅活動体である教学比較IRコモンズでは、2015年からコモンズ参加大学において共通のウェブ・サーベイを用いた学修行動比較調査を実施しています。その結果は参加各大学において個別にそれぞれの目的に合った分析がおこなわれると共に、参加大学内で適宜有用性を判断しつつ比較分析・検討が施されています。ここでは調査実施母体である教学比較IRコモンズとして、個別大学に拠らず、参加大学全学生を総計した結果の一端について公開します。今回は7年目の調査です。参加大学は24大学、当調査では最多の約2万7千名余りの大学生たちが寄せた有効回収の結果から、またいくつかの発見と確認ができました。

なお、他の結果や情報、方法の詳細についてはコモンズのwebページ（Google検索などで「教学比較IR」と）をご覧ください。

実査期間（全体）2021年7月～22年2月

調査実施方法 ALCS独自のスマート・ウェブ・サーベイ

調査大学数 24

有効回収数 27481

有効回収とは80設問への回答率が60%以上等、ALCSの有効回収3基準を満たした回収

回答者学年構成 1年生57% 3年生43% 1、3年生間での比率

性別構成 男性20% 女性80%



有効回収数



回収率

24大学間平均



全回収数中の有効回収率

この調査は1、3年生を調査対象にすることを基本にしていますが、大学によっては別の学年でも実施しています。

参加大学（名称の50音順）跡見学園女子大学 大阪学院大学 大妻女子大学 お茶の水女子大学 嘉悦大学 川崎医科大学 京都看護大学 京都光華女子大学 京都女子大学 共立女子大学 金城学院大学 就実大学 相山女子大学 津田塾大学 帝京大学 田園調布学園大学 東京女子大学 長崎県立大学 奈良女子大学 日本女子大学 フェリス学院大学 宮城大学 明星大学 横浜市立大学

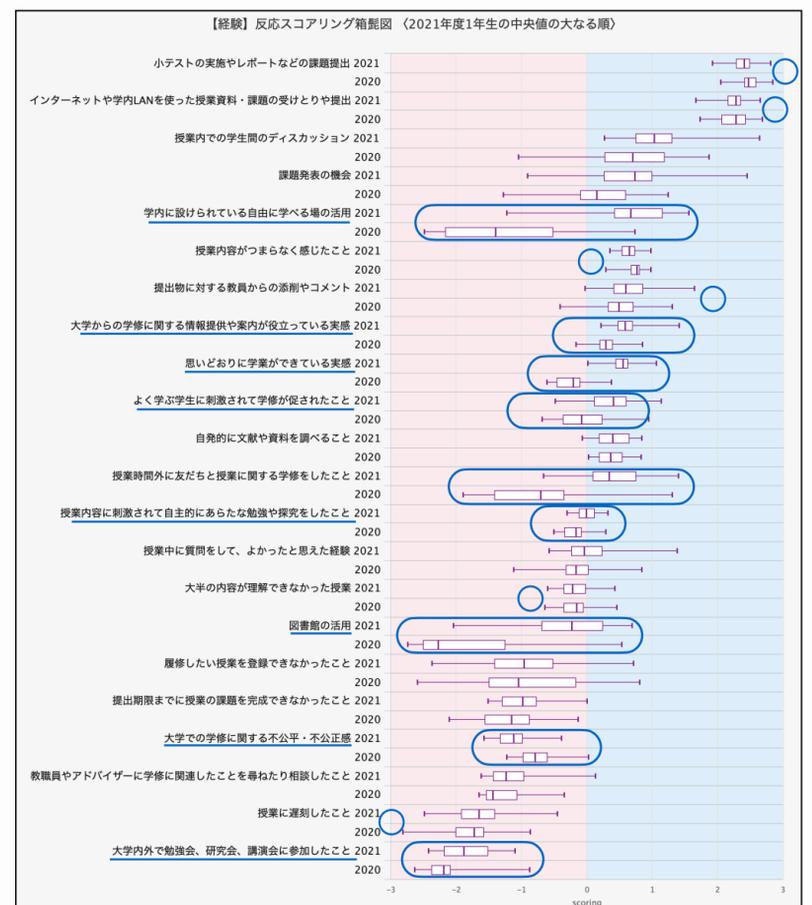
経験 大学の授業や学びに関する経験

以下4つの設問群の箱ひげ図は、調査対象各大学の昨年度と今年度の1年生の各設問についてのスコアリング・データ*の平均値を用い、それらを今年度の中央値の大なる順に表示した結果です。本年度も大学の教学状況は昨年度と同様の制約が付きまわりました。ただし昨年度に比して大学によりその対応には相違があり、その違いが学修行動に反映された可能性がかなりあります。そこでここでは前年度との1年生間の比較をとりあげました。

昨年度とのデータ構成は2大学があらたに加わった24大学でした。箱ひげ図の特性を利用して、比較対の箱の部分が完全、またはほぼ重なりがなかった（一方の箱前半部の後半と他方の箱後半部の前半が重なる）ケースを差異として認めるという基準で、今年度の回答結果が教学のうえで一般的にみても良い方向に変化したところを青、その反対方向に変化した設問を朱色で囲って表現しました（実際は存在しなかった）。また昨年度あきらかに改善を示した項目で今年度もその改善水準が維持されたところは青の円を記しました。

「経験」群では22設問中9設問で、肯定的な方向に明白な差異をみましました。また、6設問では昨年度、その前の年より明白に改善をみたその水準を維持しました。つまり、昨年度生じた感染対策による遠隔授業の実施やネットワーク・コミュニケーションの活用による教学上の質的な変容が学生の教学経験上は、改善を促すことにつながり（典型的には小テストの実施やレポートなどの課題提出、それらに対する教員からの添削やコメント、あるいは授業がつまらなく感じるものの少なさや大半の内容が理解できない授業の存在など）、また昨年度、経験において損失を被ったことがらについては、本年度、全体的には従前の水準に、ほぼ改善復帰したことが認められました（典型的には学内に設けられている自由に学べる場や図書館の活用、あるいは思いどおりの学修ができていく実感【全体的には否定域に陥った昨年度から肯定域への移行】など）。

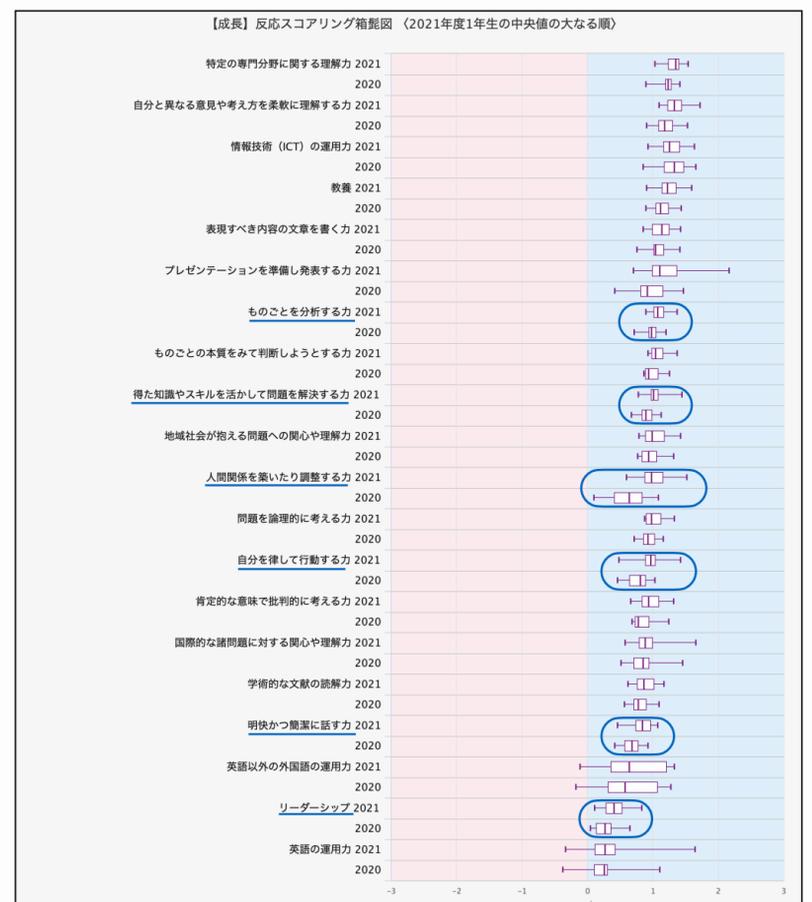
ただし、復調をみた項目でも、とくに施設利用関連については、大学により対応がかなり異なっていたことが箱ひげの長さの大きさに、そのまま反映されたようすもうかがえます。学生のことを慮った利用制限も過度であれば、学生自身の教学環境を損ない、それが実際に大学間格差につながる、そうした読みが教学マネジメントの現実感覚として求められるといえそうです。



成長 入学時からの成長感

この設問群は入学時に比した成長感を問うています。ですから、例年1年生の回答は、全体に肯定域にありながら大学間差異は大きくなく、前年度との差異もほとんど認められない傾向にあります。ところが、本年度は同様の傾向を維持しつつも、20項目中7項目、およそ1/3の項目で前年度よりも肯定方向に差異のある結果をみましました。

昨年度の特異な教学状況の影響は、一昨年度との比較で成長感にはさほど影響をみませんでした。しかし、今年度は大学によっては昨年度の教学状況から離脱し、キャンパスに活気が戻ったことで反動的に元気を取り戻したところが多かったようすがうかがえました。箱ひげの箱部分が明白にずれて差異を示した項は「人間関係を築いたり調整する力」でした。在宅学修が強いられた昨年度から、今年度は直に同輩と触れあう機会が増え、人間関係の価値をあらためて実感できたことが多かったのかもしれませんが。この設問への回答ぶりが成長感で昨年度よりも一層肯定的な反応を得た他の設問にも反映された観があります。すなわち「自分と異なる意見や考え方を柔軟に理解する力」「自分を律して行動する力」「明快かつ簡潔に話す力」「リーダーシップ」、いずれも対人関係の行動特性にかかわる項で、普段は年度間で差異が生じるような設問ではありません。また、「ものごとを分析する力」「得た知識やスキルを活かして問題を解決する力」にも前年度より一層の肯定感が増しました。しかし、もしこれらが反動的に形成されたとすれば、来年度以降の回答にはいささか不安があるかもしれません。



*スコアリング・データの生成法および箱ひげ図についての詳細はコモンズウェブ・サイト <https://cmpir.jp>の説明をご覧ください。

時間 日あたり、または週あたり平均値

昨年度の教学状況の異常事態で在宅学修が全般化した結果、それがそのまま授業に関する授業時間外の学修時間を伸張させるという結果を生み、その前年度の一日あたり1時間半という大学間平均値は、当調査、というよりおそらく史上初めて、2時間を超えるという、すなわち多くの大学の1コマの授業時間を超えるという画期的な結果をもたらしました。むしろそれが異常事態そのままの反映にすぎず、数値自体が異常以外のなものでもないという受け止めは容易にできます。授業に関連しない学習時間については年度がかわり、回答する対象学生が全員入れ替わっても両学年ともに、驚くほど恒常的だからです。

ただ、それでもそこに一抹の可能性を探るとすれば、人間の習慣形成にその拠りどころを求めることができそうです。昨年度に比較すれば、教学環境の異常性は正常に戻りつつあった今年度の結果が授業時間外にも授業に関する学修時間を相応にとったという事実があったことで、それがそう簡単には後戻りしないだろう、という希望は、今年度の回答結果に読めるかもしれません。両学年ともに前年度より減少傾向にあったものの、ほぼ2時間というところは維持されました。

アルバイトの雇用環境は昨年度来、芳しくないとは聞くものの、実勢的にはその就労時間報告にそれと相関した動きは少なくとも1年生については明白には認められませんでした。週5日就労が平均的な姿ではないとしても仮にそうであったとして、いわゆる学修や学習と認識される時間よりもアルバイトに費やしている時間の方が長いという現状をみると、先の項でみた「人間関係を中心とした成長感」をもたらしているのは、大学における学びに由来するというよりも、アルバイト先で培われている学びに依拠しているところが大きいかもしれません。

授業に関する授業外学修時間



授業に関連しない学習時間



アルバイトなどの就労時間



満足 教学に関わる満足度

昨年度「満足」群の設問は18設問中8設問で、その前年度よりも明白な下落にみまわれました。突然にして大幅な教学環境の制約を受けての当然の結果で、大学にとっては大きな損失となりました。「総合的にみた大学での学び」あるいは「大半の授業の質」においてあきらかな満足度の低下をみたことは、その集約としての結果でした。

これに対して今年度は一転して右図で確認できるように、前年度の評定を下回った設問は皆無。「総合的にみた大学での学び」「大半の授業の質」を含めたこの群の8割弱の設問であきらかな改善評価を得ました。大学によっては今年度の教学環境が昨年度とさして変化せず、在宅学修主体でキャンパス施設利用もままならない状態が続きましたが、多くの大学で昨年度の制約が一部ないし大幅に解かれたことによる解放感が、この全面的な満足感の高揚につながったと考えられます。ただし、高揚・改善とはいっても、たとえば昨年度大学平均で不満足域に落ちた「学費に比した教育内容」が今年度は平均も箱も肯定域に改善をみた例がそれにあたりますが、その多くの改善とは一昨年度までの従前の水準を取り戻したという改善です。

したがって、これをたとえば授業実施におけるオン・オフライン・ハイブリッド型への評価であるとか、CMS等による授業支援システム活用の効果などとして捉えることは拙速でしょう。一種の解き放たれによる改善効果であるとするれば、来年度はある程度の揺り戻しがあるかもしれません。今年度の満足度評価はこの後の年度の評価経過をみることで正当な解釈ができるといえそうです。



希望 在学中に望むこと

学生たちが在学中の学修において「最も」望んでいることは例年、大方の大学間の差異がそれほどなく、最も安定した評価ポジションを得ています。昨年度の下況下でも、さすがに在宅に制約されたことで「チーム学習」への求めが従前よりも高まるという結果を認めましたが、その他の設問への回答には明白な差異が認められませんでした。本年度も同様で、全設問において前年度に比した変化は認められませんでした。

ただ、これは偶然による差異の範囲といえそうなところですが、大学間平均値の順位づけで、これまで一貫して、学生が最も強く希望していることが、第一に「幅広い知識や教養を身につけ視野を広げること」、第二に「専門分野の内容を十分に学ぶ」ことといえたことが、これまで第三にあった「資格を取得するための勉強をすること」が本年度、順位上は第一に来たという変化はありました。

もともとこの上位3項はほとんど差異なく常に高い希望が示されてきたことから、換言すればこれも偶然、第一に教養、第二に専門、第三に資格といえてきただけのこともいえます。ですから、今年度のこの変化をあたかも社会情勢の不安定性を感じ取った学生の志向変化を反映したかのように受け止めることはいすぎ、でしょう。

なお、本年度の対象学生を確認しておけば、前年度大学のすべてに加えてあらたに2大学が加わりましたが、その有効回収総数に占めた新参加大学の有効回収数が占めた割合は7%でした。

